

## 要素間のつながりの程度が理解感に及ぼす影響について

— 読解における理解感に影響を及ぼす要因の検討 —

野上 康子

### 問題と目的

多くの認知活動は、メタレベルと対象レベルが相互に結びついた、ダイナミックな過程である。対象レベルは認知活動の観察可能な実際の状況であり、メタレベルは認知活動についての認知である。メタレベルには認知活動を行う際の方略についての知識や、対象レベルの状態についてのモデルが含まれている。そして、2つのレベルの相互作用をメタ認知と総称している (Nelson & Narens, 1990など)。

読解におけるメタ認知研究では、メタレベルでの理解の評価とそれに伴う制御行動のことを(読解)モニタリングと呼び、読みの過程での自己の認知状況の対象化、すなわち、評価や調整に対してさまざまな検討が加えられている(笠原・丸野, 1987)。本研究では読解モニタリングに関して明らかにすべき問題のうち、「読み手は『自分の理解が適切である』ということをもどのようにして決めるか」を扱っていく。

ところで、「理解が適切である」という評価は、「わかった」という感覚に相当する。よって、上記の問題は「読み手が『わかった』と感じるのはどのような状況か」という問いに置き換えることができる。そこで、本研究では読解における「わかった」という感覚を『理解感』、正しく文章の内容を捉えることを『理解』と呼び、どのような要因が『理解感』に影響を及ぼすかについて検討する。

### 調査

この調査では、メタレベルに相当する理解感と、対象レベルに相当する理解を測定し、両者の関係を調べる。さらに、理解感に影響を及ぼす要因を探る。

#### 〈方法〉

被験者は大学生259名である。はじめに、「理解感」を測定し、これに影響をおよぼす要因を探るために質問調査を行った。被験者は材料文章を読んで、理解感を測定する質問1項目、文章理解に関する質問82項目に回答した。材料文章として、池上嘉彦著『記号論への招待』から一部を抜粋して使用した。次に、「理解」度を測定するために材料文章についての客観テストを行った。さらに、113名の被験者に対して、要約課題を行った。

### 〈結果と考察〉

理解感得点と理解得点、要約得点との相関はいずれも有意ではなかった。よって、「理解感」は「理解」度そのものを反映しているのではないと結論づけることができる。文章理解に関する質問82項目について因子分析を行った結果、「要旨の把握」「興味・関心」「文章構造の欠陥および既有知識との矛盾の認知」「読みやすさ」の4つの因子が抽出された。因子をそれぞれ対応する尺度として、それぞれの因子のみに高い負荷量を示す項目の得点とを尺度得点として算出し、3つの得点との関係を調べた。

理解得点および要約得点と各尺度得点との相関はまったくないか、かなり低い。これに対して、理解感得点については、「要旨の把握」尺度との相関が高く、両者の関係が強いということがわかる。このことから、「要旨を把握している」程度が「理解」ではなく「理解感」に影響を及ぼしていると推測できる。しかし、要約得点と「要旨の把握」得点との相関は低く、「要旨を把握したと感じる」と、「実際に要旨を把握している」とは同義ではない。従って、「実際に要旨を把握している」程度ではなく、「要旨を把握していると感じる」程度が「理解感」に影響を及ぼしていると推測できる。

### 実験1

読解が要素と要素のつながりの作業であり、読み手は重要性や理解感を基準に文章内容を表現するための構成要素を選択すると考えると、読み手が文章の要旨を把握したと感じるのは、読み手が選択したいくつかの重要な情報が、つじつまが合うよう統合された場合であるといえる。そこで、実験1では2つの文章を組み合わせる全体としては意味の通らない文章を作成し、注目する部分を操作することによって読み手の理解感の変化を調べる。

#### 〈方法〉

大学生145名を、1文章群、2文章群、線なし群の3群に分けた。材料文章として、河盛好蔵『愛・自由・幸福』から、一続きの段落4つ、森本哲郎『ことばへの旅2』から、一続きの段落2つを抜き出して組み合わせ、全体としては意味の通らない6つの段落から成る文章を作成した。第3段落、第5段落が森本の文章で成ってい

る。実験は集団で行われ、課題1、課題2、課題3の順に行われた。課題1で、被験者は材料文章を読んで、文章全体で大切だと思う部分に下線を引く。その後、被験者の理解感が測定される。課題2で被験者は、1文章群、2文章群では、実験者に提示された下線部分に注目しながら課題1と同じ文章を読む。下線は前者では河盛の文章のみに、後者では河盛と森本の文章の両方に引かれている。線なし群はもう一度文章をよく読む。3群とも、文章を読んだ後に課題1と同じように被験者の理解度が測定される。課題3では8つの問いからなる理解度テストが実施された。

#### 〈結果と考察〉

課題2で1文章群の理解感が2文章群より高かった。1文章群では注目した部分をつなげて筋をつくるのが容易であるが、2文章群では注目した部分が2つの無関係な文章にまたがっているので、それらを関係づけてひとつづきの筋をつくるのが困難であると考えられる。したがって、文章を読む際に注目した要素どうしの関係がつながりやすい場合に、理解度が高まるということが推測される。

#### 実験2

実験2では文章内に含まれている筈の情報が削除されて、全体のつながりが薄くなった場合に、つながりを埋める情報の有無が理解感に及ぼす影響を調べる。具体的には、一部分を削除して全体としてのつながりの薄い文章を用い、削除した部分の情報を与えるか否かによって理解感がどのように変化するかを見る。流れが不自然な文章でも、その流れを自然にするような情報を読み手が持っていれば、理解感を得ることができると考えられる。

#### 〈方法〉

被験者は大学生144名である。材料文章として以下の3つを用いた。

文章A：宮本幸雄の文章。16段落から成る。

文章B：林壽郎『ツルはなぜ一本足で眠るのか』の1続きの段落8つを抜粋。

文章C：『パーフェクト問題集 中3国語』（旺文社）より、5段階から成る文章。

文章A、B、Cを被験者ごとにランダムに3条件（削除－要約あり、削除－要約なし、削除なし）にわりあてた。課題1では、削除－要約あり条件の文章の削除部分が与えられる。課題2では、削除なし条件では上記の文章がそのまま被験者に与えられる。削除条件では、被験者に与えられる文章の一部が削除される。ただし、課題1で与えられた文章と課題2で与えられる削除－要約あり条件の文章との関係は、被験者には知らされない。実験は課題1、課題2の順で集団で実施された。課題1で被験者に与えられる課題は、文章を読み、要約することである。これによって、課題2で削除される部分の情報を被験者に与えている。課題2では、削除条件には、課題1で削除部分を要約した文章と他の1つの文章が割り当てられる。前者が削除－要約あり条件、後者が削除－要約なし条件になる。残りの1つの文章が削除なし条件となる。各々の文章について、被験者の理解感が測定された。

#### 〈結果と考察〉

削除－要約なし条件の理解感が他の2群にくらべて低かった。課題2において、2つの削除条件で被験者に与えられる文章は同一のもので、一部を削除してあるため、全体としてのつながりが薄くなっている。2つの条件の違いは、課題1において、課題2で与えられる文章の削除部分を要約をするか否か、である。理解感は、削除－要約あり条件の方が削除－要約なし条件より高かったので、つながりの薄い文章を読む際には、そのつながりを強めるような情報を持っている場合に理解感が高まるといえる。したがって、文章を読む際に、文章内の要素どうしの関係がうまくつながったときに理解感が高まるということが推測される。

#### 今後の課題

実験1、実験2では要素のつながりやすさを操作したが、要素間の連関の程度を直接調べているわけではない。今後、要素間の連関の程度を評価する指標を開発する必要がある。さらに、同じ文章に対して理解感が高くなったり低くなったりと、変化していく状況を捉え、理解感の変動の様子を「理解」の様子と照らしあわせて調べていくことが望まれる。